

# 「UNHCR 難民映画祭パートナーズ上映」と 動画講演におけるコミュニティ通訳実習実施報告

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語・ポルトガル語圏専攻准教授

吉田理加

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語・ポルトガル語圏専攻教授

小池康弘

愛知県立大学外国語学部ヨーロッパ学科スペイン語・ポルトガル語圏専攻准教授

糸魚川美樹

## 1. はじめに

2022年4月に「コミュニティ通訳学コース」が愛知県立大学大学院国際文化研究科に開設され、完成年度を迎えた2023年度、必須科目である「コミュニティ通訳実習」が初めて実施された。本稿ではコミュニティ通訳実習を実施した公開講演会「UNHCR 難民映画祭パートナーズ上映『ナディアの誓い - On Her Shoulders』」<sup>1</sup>の実施の報告をし、考察する。

「コミュニティ通訳」とは、誰しもが自分の言語で必要な情報にアクセスすることができるようにホスト社会の言語に通じていない人々の「言語権」を保障するための通訳である。日本ではまだ「コミュニティ通訳」の一般的な認知度は高くないが、外国語での相談やその通訳を担う仕組みも出来上がりつつある。行政や教育の分野、そして国際交流センターなどの相談窓口では「語学相談員」や「相談通訳者」、「多文化共生推進員」などの名称で呼ばれる人たちが対応している。また、医療や司法などの領域では「通訳人」や「通訳者」と呼ばれる人々が通訳を担っている。コミュニティ通訳研究ではこれら医療、教育、行政、司法分野を対象とした研究がなされている。近年、世界規模で紛争が起きている状況から難民申請が欧州で増加しており、そのため、難民申請場面における通訳研究は特に欧州で盛んになっている。一方、この分野の研究は日本国内ではまだ着手されていない (cf. Pöllabauer, 2023a, 2023b)。コミュニティ通訳研究が必要とされる分野の1つとして、日本でも難民申請場面における通訳研究が今後ますます重要性を増すと思われる。

今回実施した「UNHCR 難民映画祭パートナーズ上映」とは、国連 UNHCR 協会がラインアップする難民映画を学校や職場、自治体などで上映し、映画を通じて、難民問題への理解を深め、日本社会に共感と支援の輪を広げている取り組みだと説明されている<sup>2</sup>。本学のコミュニティ通訳学コースが、カリキュラムの一部である「コミュニティ通訳実習」の実践の場として本企画を開催することで、難民とコミュニティ通訳の結びつきを社会にアピールできると考えた。

このような背景と関心を基に、公開講演会「UNHCR 難民映画祭パートナーズ上映」を難民

<sup>1</sup> 愛知県立大学大学院国際文化研究科・地域連携センター主催公開講座、後援 国連 UNHCR 協会、愛知県立大学全学同窓会

<sup>2</sup> 国連 UNHCR 協会 HP 参照 <https://www.japanforunhcr.org/how-to-help/rff-partners>

申請場面における通訳研究を専門とする Pöllabauer 氏の動画講演と合わせて実施することを企画し、本学コミュニティ通訳学コースの実習の場とすることにした。

## 2. 公開講演会「UNHCR 難民映画祭パートナーズ上映」実施概要

本公開講座は2部構成で長久手キャンパス多目的ホールにて開催された。第1部は愛知県立大学久富木原玲学長の開会挨拶で始まり、小池が司会をつとめ、吉田が趣旨説明を実施した。その後、ゲストとして Sonja Pöllabauer 氏(ウィーン大学翻訳研究センター教授)を招き、"Passing from There to Here: Interpreting the Life Stories of Refugees (向こう側からこちら側へ:難民のライフストーリーを通訳する)"と題した動画講演を実施した。動画講演後にはオンラインライブで同講師が登壇し、参加者との質疑応答が日英通訳・手話通訳を介して行われた。

第2部では、2018年ノーベル平和賞受賞者のナディア・ムラド氏のドキュメンタリー映画である『ナディアの誓い—On Her Shoulders』を「UNHCR 難民映画祭パートナーズ」として上映した。

本上映会の協力団体である愛知県立大学全学同窓会の宮崎副会長のあいさつの後、『ナディアの誓い—On Her Shoulders』が上映された。上映会には計77名の来場があり、参加者からは「ナディアさんの体験を知ることができ、こうした人が声をあげるには通訳者の存在が大きく影響することが知れた」といった声が聞かれた。最後には、奥田隆史地域連携センター長が閉会のことばを述べて終了した。

## 3. 動画講演とコミュニティ通訳実習

まず、第1部の Sonja Pöllabauer 氏(ウィーン大学翻訳研究センター教授)の "Passing from There to Here: Interpreting the Life Stories of Refugees (向こう側からこちら側へ:難民のライフストーリーを通訳する)" と題した動画講演の内容を紹介する。講演タイトルが示すように難民申請者たちは、一般に、ドキュメンタリー映画の主人公ナディアのように壮絶な経験をした「向こう側」から安全な「こちら側」へとやってくる人たちであるが、「向こう側」と「こちら側」では、言語やコミュニケーションの仕方が異なる。しかし、難民申請が成功するか否かは言語使用やコミュニケーションを通して自らの経験や難民申請の理由をいかに説明し、審査官に信ぴょう性を認められるかにかかっている。難民申請者は、様々に異なる地方方言の話者であったり特殊なコミュニケーションスタイルを有する者であったりすることが多い。彼らが申し立てることを審査官が理解できる言語に通訳するのが難民申請場面における通訳者の役割である。一般的には、難民申請者側も審査官側も通訳者は「正確」に通訳していることを前提として捉えているが、実際のところはいかに正しく通訳できるかによって、審査の結果が影響を受けると言っても過言ではない。しかしながら、このような重要な役割を担う通訳者の多くが通訳技術や専門用語、専門知識などの教育・訓練を受けていないという現状がある。そのため、難民申請の面接審査における通訳が直面する社会言語学・語用論・異文化コミュニケーション的課題を視野に入れた通訳者訓練・養成が重要である。以上が動画講演の要旨である。

この動画講演に関して、コミュニティ通訳実習は、日本語への字幕翻訳と動画講演と質疑応答の中国語への同時通訳を実施した。その内容を次項以降で説明する。

### 3.1 英日字幕翻訳実習

5月末日に講演者から講演用動画が届き、3人の院生が18分の動画を英語から日本語に字幕翻訳をした。その手順を報告する。

教員からの指示は以下のとおりである。まず、事前に講演内容に類似した文献である Pöllabauer (2023b) を配布し、内容理解に努めるように指示した。動画講演の長さは18分あったので、それを3等分し、院生1人あたり約6分ずつの分担とした。動画と英語音声を自動書き起こししたものを配布した。用語は英日リストを作成し共有し、常時確認ができるようにクラウドで共有した。翻訳作業や字幕作成作業中に生じた疑問は、院生同士で話し合い解決するように指示し、どうしても解決が困難な場合は実習科目担当教員に相談するように指示した。動画講演で用いられたスライド資料は教員が日本語訳し、日本語字幕の初回提出時に共有した。

字幕作成にはオープンソースのフリー字幕作成ソフトの Aegisub<sup>3</sup> を使用し、院生はスポッティングも担当し、日本語字幕の基本ルール(4文字/1秒、字幕1行13~14文字以内、2行まで)を遵守しながら字幕翻訳作業を開始した。なお、Aegisub に関しては、前年の「公益通訳と社会資源」の授業で字幕翻訳を作成するための手順を学んでおり、今回の実習ではその知識を応用し実際に字幕を作成した。

院生は、翻訳し、スポッティング<sup>4</sup>した日本語字幕を6月17日までに提出した。6月26日に日英言語ペアの通訳演習指導担当教員が、提出された日本語字幕についてフィードバックを行うセッションをオンラインで実施した。その際、教員が作成したスライドの日本語訳も参照し、最終的な訳語を決定した。その後、院生が各自の担当字幕を修正し再提出した。後に、英日字幕翻訳者と吉田が最終チェックをし、動画に字幕を焼き付け完成させた。

#### 3.1.1 英日字幕翻訳実習の院生の課題

本項では、字幕翻訳実習を振り返り、教員と実習参加院生との間で意思疎通並びに作業の指示の解釈などにおける齟齬が生じていたことを記述し、改善の仕方を考察する。

まず、5月末日に動画と共に、自動書き起こした英語音声スクリプトを配布し、共有の統一用語リスト(英日)の作成を指示した点についてである。

##### ・訳語の不統一とプロジェクトマネージャーの不在

一つの動画講演を3人で分担して翻訳したため、同じ英語の語句や表現が、翻訳担当者が異なると、異なる日本語訳になってしまう状況が生じた。指導教員からは、3人で対訳用語リストを共有しながら、訳語を統一することの重要性を事前に説明し、指示していたが、院生たちの間では教員の認識との間にずれがあった。そのため、用語リストには各院生が用いた訳語が記載されたが、それを統一する動きにはつながらなかった。訳語の統一というのは、一種の権力作業を伴うものであり、同等の責任レベルを有する院生間では、その権力を作動させることができる院生はいなかったことが統一する流れにならなかった原因だと思われる。または、プ

<sup>3</sup> Aegisub に関しては <https://aegisub.org/> を参照願いたい。

<sup>4</sup> スポッティングとは、映像の初めと終わりのタイミングを決定して、字幕が適切に現れるようにすること。

プロジェクトマネージャーを任命して、3人の間での合意を形成するためのリーダーシップをとることができるような権力をあらかじめ与えていなかったことも原因の一つとして考えられる。最終的には、担当教員とのフィードバックセッションにて助言を求め、最終的な訳語の統一をはかった。訳語の統一が難しかったと報告されたのは以下の用語・表現である。

- ・ ‘asylum’  
動画講演中に様々な語句の組み合わせで頻出する鍵語であった。院生の当初の日本語訳は「庇護」や「亡命」などの英和辞典に載っている訳語となっていたが、講演の内容と鑑み「難民(申請)」という用語を用いることにした。この単語が使われている用語には以下のものがあり、一貫性をもたせた訳にするためカッコ内を確定訳とした。‘asylum context’ (難民申請の文脈)、‘asylum proceeding’ (難民申請手続き)、‘asylum procedure’ (難民申請手続き)、‘asylum interviewer’ (難民面接官)、‘asylum officers’ (難民審査官)、‘asylum applicants’ (難民申請者)、‘asylum seekers’ (難民認定希望者)、‘asylum interpreting’ (難民申請手続きの通訳)

次に翻訳が難解であったと思われる点についてまとめる。

- ・ 固有名詞 (人名)  
講演の中に文献からの引用があり、その人名を特定することが困難であったようである。スライド中に記載のない文献が著者名と出版年で紹介されていたため、音声だけを聞いて、その人名を特定することが困難を極めた。具体的には **Jacquemet (2000)**と **Blommaert (2001)**である。社会言語学や言語人類学の専門家の論文のため、あらかじめ知らなければ、音声から固有名詞の正しいスペルを書き出し、人物を特定することは非常に困難であった。この該当ケースのように英語圏の馴染みのある名前ではない場合も同様である。
- ・ 文脈に応じた適切な訳  
同様に、翻訳が難しかった用語に、“discursive process” (談話プロセス) や “contextualize” (コンテキスト化する) という学術用語の訳出が困難であった。また “vulnerable applicants” (弱い立場の申請者) を「傷つきやすい申請者」とするなど、語レベルの訳出にとどまり、発話全体を文脈に応じてわかりやすく訳出することに困難がみられた。そのため、語レベルでは間違いではないが、発話全体として意味がつかめない翻訳が字幕として提出されてきた例が多くあった。
- ・ 字幕用の翻訳  
前述したように、字幕は1秒に4文字以内、1行13から14文字で2行以内という制限がある。映像と字幕翻訳が同期して現れることが理想なので、前から順送りで訳すことが推奨される。また、制限字数内で翻訳し字幕として表示しなければならないという制限もある。院生が共通して難解であったと指摘している点に、制限字数内で翻訳をすることが挙げられた。そのためには、発話内容を理解し、少ない文字数で等価な意味を表現

できる訳にするため、字義通りの翻訳ではなく、「解釈」のレベルで等価な翻訳が求められる。院生にとって原発話を咀嚼しわかりやすく日本語字幕で表現することは勇気と決断力が必要な作業であったようである。

### 3.1.2 英日字幕翻訳実習まとめ

字幕翻訳実習を終えた3人の院生から提出された報告書から著者の了解のもとに引用し、まとめとする。

まず、本実習を通じて学んだ点として、「翻訳」という作業が、「直訳」するだけでは不十分であり、読み手がわかりやすく理解できるように自然な言い回しを訳に反映させることが重要であることに気づかされたことが以下のように述べられている。また、訳語の統一をはかる重要性についての意識が十分ではなかった点も反省点として挙げられている。

日本語字幕の作成にあたり、社会全体や学術領域で一般的に使用されている訳語の選択の必要性を学んだ。プロの通訳・翻訳者ではない我々実習生にとって、訳語の適切な選択をするためには、実習生間での意見交換の場を設け、かつ先生方にご指導いただきながら、訳語の統一作業を進めることが求められていた。しかし、今回その重要性を軽視し、そのような機会を十分に設けなかったことが反省すべき点である。(実習生1)

反省点として、同じスライドを訳す翻訳者とともに、用語リストを作って訳語を揃えるということまで作業時間の中で十分に終えることができなかった点については次回の課題としたい。(実習生3)

つまり、「翻訳」作業に従事する際、無意識に普段の言語使用では用いないような日本語の言い回しや表現を用いた訳文になっていたという。おそらく、起点テキスト(原文)から目標テキスト(訳文)に訳す際に、語のレベルで置き換え訳出していくような一種の「形式的等価」を求めた翻訳をしていたが、「動的等価」や「語用論的等価」と呼ばれるような、目標テキストの読み手に対するのと同様の働きかけや印象を起点テキストの読み手にも呼び起こすような訳を目指すことの重要性に気づいたのであろう。

また、実習生として最も困難を感じた点として以下のように、「翻訳」作業以外のリサーチや専門知識の習得に時間がかかる点を述べている実習生もいた。

限られた時間の中で翻訳を行い、その正確さや表現の適切さについて検討を行わなければならないということであった。今回の講演のテーマであった難民及びその現場での通訳については、専門的な知識を有する領域ではなく、自分自身で背景知識を学びながら翻訳を行う必要があった。このため、翻訳そのものに専念することは難しく、翻訳を行うための準備に多くの時間を使いながら作業を進めていたが、その結果として、自身の翻訳を推敲する時間が不足するという状況に陥った。

こうした経験からは、翻訳という行為が単純に言語を訳すにとどまらず、その翻訳する内容への理解など、翻訳者は自身のあらゆる”知識”を活用する必要があることを体

験的に知ることができた。もちろん、これまでの授業等を通して、通訳・翻訳者には専門家と同レベルの専門的知識が求められることは理解していたが、実習を経て、そうした知識が翻訳を依頼されてから身に付けるのでは十分ではなく、日々の学びの積み重ねによって蓄えられるものであることを実感した。(実習生2)

「翻訳」という営為が言葉の置き換え作業ではなく、そのテーマの専門知識と表裏一体の作業であることを体感して学ぶことができたようである。また、「翻訳」という作業が幾度も推敲というプロセスを重ねて出来上がるものであることも学んだという報告があった。

翻訳を行う情報の選択は、一度の翻訳作業で決定できるものではなく、ある部分を翻訳した後に再度全体を見渡し、その上で修正を行っていくという複数回にわたる翻訳作業の中で行われていくのだと学ぶことができた。(実習生2)

3人が特に困難な点として共通に取り上げていたのは、字幕翻訳特有の問題である。

字幕作成上のルールに従いながらも自然な訳出を目指すことである。句読点をつけないことはもちろん、CPS(1秒間の文字数)に留意して「1秒4文字、1行14文字、1スライドに2行まで」を目安に作成することの難しさを痛感した。この作業を通じて、長々とした直訳にならないように、スポッティングでできるだけ細かく文を分け、意味を正確に取りながらも短いフレーズを作成することで、ルールに従った見やすい字幕を作成することができることを学んだ。1つの文章の中で、原文と訳文の前後関係にズレが生じることも避けられないが、実際に音声と字幕を確認した際の違和感はさほどないことが分かった。(実習生1)

文字数に関して制限ある中でどの情報を取捨選択するのかという観点について理解を深めることができたと考える。特に、講演者が話している内容を、そのシーンに合わせた字幕として翻訳を行う際には、字幕の切り替わりに不自然さがなく、また、講演者の意図が正しくみ取られた字幕として翻訳する必要がある。そのためには、文脈やその表現を使用するために必要な文字数、その内容が語られる動画上の時間など、多くの要素に気を配りながら作業を進めることが重要であると感じられた。(実習生2)

スポッティングをする際に一番気をつけなければならなかった点は、文章量である。どこで区切るのかによって、表示される時間や、1スライドあたりの文字の数、したがって情報量も変わってくる。できるだけ、全体を見渡した時にバランスがいいようになるよう、気をつけた。工夫した点としては、2行続きの字幕が何度も続く際は、間に1行のスライドを挟むように、スポッティングし直すことで、字幕を見る人の負担がかからないように工夫した。文字情報が過多になると、スライドそのものにある情報をキャッチする労力が割かれてしまうので、字幕の量や読む人の負担を考えることも必要かもしれないと思った。(実習生3)

これまで見てきたように、通訳・翻訳業務に従事した経験のない実習生が字幕翻訳業務をチームで担当したことによって、様々な気づきと学びがあったことがわかった。次項では、プロの日英通訳者と日本語と日本手話の通訳者のパフォーマンスからどのような学びがあったかについて報告する。

### 3.1.3 プロの通訳者(英日逐次通訳、日本語・日本手話通訳)のパフォーマンスを観察

日英通訳者は講演者と会場の聴衆の質疑応答の際に逐次通訳をした。逐次通訳とは、話者が数分話した後、通訳者が通訳し、また話者が話すというサイクルを繰り返す。話者が一区切り話す時間は1分から5分ほどで、通訳者が訳出をすることが普通であるが、1分から5分ほどであれども、非常に多くの情報量であり、話された内容を正確に記憶し、他の言語にもれなく正確に通訳するのは訓練と才能のたまものである。ベルジュロ・鶴田・内藤(2009, p. 15)によると、英語やフランス語で1分間の発話は120から150ワードになるので、5分間話せば700ワードにもなる。通訳者は5分の発話を聞き終わると、すぐに訳出し始めるのだが、記憶のリテンションのためにノートテイキング(メモ取り)のスキルの訓練も受けている。今回の質疑応答では、英語での応答が7分間に及ぶこともあり、それをよどみなく同じく7分で日本語に正確に通訳がなされ、聴衆側も感嘆のため息が漏れるほどであった。実習生は、英日通訳者のすぐ後ろの席に座っており、通訳者がどのようにメモを取り、音声を聞き、リテンションして正確に通訳するかを身近で観察することができた。その結果、「コミュニティ通訳研究」や「コミュニティ通訳翻訳演習」の授業で知識として学んできたことを理想的な形で具現化している実例を目の当たりにすることができたことが大きな収穫であった。それは、実習報告書にも次のように記載されていた。

難民映画祭当日は、英日通訳者の後方でメモ取りや通訳の様子を観察することができた。最初の音声テスト(Sonja Pöllabauer氏との会話)で、会場で生音で聞くと音割れがあることが分かったため、パソコンからオンラインでつながイヤホンを使って聞くことを、その場で決められていた。通訳する会場の状況に臨機応変に対応されていたことに驚いた。また、生音で聞くと、会場にいる人々が発する予期しない音によって、その部分の発話が聞き取れない可能性が十分にあるため、細心の注意を払い、集中力を保つ必要があるということが分かった。(実習生1)

今回の講演では、ペラバウアー先生に質問する時間があり、その際の英日通訳者の通訳を近くで見ることができた。ずっと手を動かし続けながらメモをとるスピードの速さ、そのメモは意味ごとにスラッシュが引かれ区切られているがその枠の中にたった3語ほどしか書かれていなかったこと、長い文章であったがペラバウアー先生の発言が終わったと同時に最初からすぐに訳し始められていたことなど、圧巻の通訳であった。このような長い訳でもすぐに前から訳せたのは、話を聞きながら通訳者自身が深い理解を得た上で通訳をしているからとのことだった。通訳演習を行なっている中で、メモを取りきれないことや、意味を理解しきれないところに課題を感じていたので、やはり訓練を積み、英語力をさらに高めることや、関連語彙の準備を怠らない姿勢を学んだ。(実習生3)

今回の見学では、プロのメモ取りの技術を現場の状況を踏まえて見学することができ、自身が今後訓練を行う必要性がある内容、つまり英語力の向上によるメモへの依存の軽減の重要性を確認することができた。加えて、通訳者は頷きながらメモを取っている様子であり、内容を深く理解している様子が見られた。このことから、上記で述べた専門的・事前知識の重要性についても感じ取ることができた。プロの技術を見学することで、自身の課題や到達すべき技術的なレベルに関してより具体的なイメージを持つことができたことも、今回の実習での大きな学びであったと感じる。(実習生 2)

プロの素晴らしい通訳を身近で観察することが実習においても重要な学びを与えることが確認された。

### 3.2 中国語への同時通訳実習

この公開講座の第 1 部の動画講演では、中国語への同時通訳実習も実施された。中国語への同時通訳実習も、本番までに準備期間を設けた。実習生は、動画講演の英語版書き起こしスクリプトと、日本語の字幕翻訳と、更には日本語字幕付き動画を受け取り、それらをもとに、英語の動画講演を中国語に同時通訳できるように準備を始めた。準備の過程で日中言語ペアの指導担当教員との準備セッションを 7 月 10 日に実施した。尚、中国語への同時通訳の実習生は 1 名であったが、同時通訳は 2 名で交替しながら務める必要があるので、M1 の院生に参加してもらった。

準備の中で、動画講演で話されている内容を中国語に訳出準備するだけでなく、引用されている研究者の氏名を中国語に翻訳する準備を行ったり、講演者や引用されている研究者の論文を読んだりして専門知識を学ぶようにしたとのことである。

当日は、動画講演中は、英語を聞きながら、かつ、画面の日本語字幕を目で追いながら、そのタイミングで中国語に同時通訳をした。その後、質疑応答では、日本語から中国語へ同時通訳を行った。

実習後の報告書では、動画講演では音声は英語で届き、視界には日本語字幕が届いた。あらかじめ、中国語への同時通訳用の訳出原稿は作成してあったが、英語の原発話と日本語字幕が現れるタイミングの両方に同期させて中国語訳をデリバリーするのが最も困難であったと報告されている。

中国語への同時通訳を聞いていたのは中国出身の教員、学生、一般聴衆が数名であった。同時通訳を無事にやり終えた後、やり切ったという達成感を感じたことが報告書にかかれてあった。

本実習で、中国語への同時通訳を取り入れた理由を説明しておく。実習生はすでに通訳経験のある社会人院生で、中国語を A 言語(母語)とするものであった。コミュニティ通訳では、ブースに入っただけの同時通訳をする機会は非常に限定的であり、コミュニティ通訳者は同時通訳スキルの訓練を受ける機会はほとんどないと思われる。しかし、コミュニティ通訳において、例えば DV 被害者や重病の患者の家族、又は刑事事件の関係者、さらには教育現場で教員との面談などの場面で通訳をする場合に、発話者が感情的になり話すスピードをコントロールできなくなる事態は、コミュニティ通訳の場面では頻繁に生じる。そのような状況では、通訳のため



に発話者が話をやめて区切りを作ったり、通訳者が聞き取れなかった個所をもう一度繰り返したりするようなことが不可能な場面が多い。そのような場合、コミュニティ通訳者たちは、ブースに入り良い上質の音声を聞き取ることができる会議同時通訳者よりも、生耳で音声を聞かなければならないという劣悪な環境で同時に通訳をせざるを得ない状況におかれることになる。そのため、コミュニティ通訳者にこそ同時通訳やウィスパリング通訳のスキルが必要であると考えたことが第 1 の理由である。さらに、Hale, Goodman-Delahunty, Martschuk & Doherty (2022)において模擬警察取り調べの通訳において、逐次通訳と同時通訳の正確性を比較するためにアラビア語、スペイン語、中国北京語の70人の通訳者が逐次と同時で模擬通訳をした。その結果、同時通訳のほうが様々な場面で正確性が高いという報告がなされている。そのため同時通訳という形態を選ぶことによってより正確な通訳がなされる可能性があり、コミュニティ通訳においても同時通訳を選択肢の 1 つとして考えるべきであることがわかる。第 2 の理由としては、既に通訳経験のある社会人院生が実習生であったため、これまでに経験したことがない通訳形態である同時通訳を経験し学ぶことにより、プロ通訳者としての自分自身に自信を持てるようになり、プロ通訳者としての意識の醸成につながると考えたからである。

#### 4. 公開講座全体(第1部と第2部)のまとめ

第1部は、Sonja Pöllabauer 氏(ウィーン大学翻訳研究センター教授)の "Passing from There to Here: Interpreting the Life Stories of Refugees (向こう側からこちら側へ: 難民のライフストーリーを通訳する)" と題した動画講演と質疑応答を英日逐次通訳と日本手話への通訳付きで実施した。

第2部では、「UNHCR 難民映画祭パートナーズ上映」として『ナディアの誓い-On Her Shoulders』を上映した。自ら暮していた家、村を追われ、性奴隷とされ凄惨な経験をしたナディア、まだ取り残されている同胞のため全世界に向けて声をあげ、アピールをしている勇敢な姿と、望まずに故郷を追われ過酷な経験をしている姿の両方が映し出されているドキュメンタリーである。計77名の来場者があった。

英日逐次通訳については、前項で院生の学びの観点から触れたので、ここでは日本手話通訳について報告する。当日は、聴手話通訳者2名とろう手話通訳者1名がチームを組み通訳にあたった。ろう手話通訳者は、聴者の手話通訳者の手話通訳を見て、日本手話に通訳する者である。ろう手話通訳者の手話通訳は、聴衆のろう者にとってよりわかりやすく、自然な日本手話である言われている。一種のリレー通訳であり、ろう手話通訳者のA言語(母語)である日本手話へ通訳するものなので、聴手話通訳者がB言語の日本手話に通訳する場合と比べて、よりわかりやすい通訳になると言われている。我々が専門とする「コミュニティ通訳」学とは、社会で生活するための言語障壁を解消し、情報へのアクセス権を保障することも 1 つの重要な課題であると捉えている。その意味で、当然、手話通訳も重要なコミュニティ通訳の1つとして認識している。そのため、今後も公開講座などにはできるかぎり手話通訳を配置し、身近なところから言語障壁の解消に努める姿勢を示したい。

参加者アンケートの結果を見ると、第1部の動画講演については 84%が、第 2 部の『ナディアの誓い』上映に関しては 82%が「とても・やや満足した」と回答した。その理由を見てみると、第1部に関しては講演内容が良かった、逐次通訳、手話通訳がついていたことが良かった、難民手続きにおける通訳と通訳者のメンタルケアについて知れてよかった、通訳が専門的な訓

練が必要だということが知れてよかったなどのコメントが寄せられた。特に、逐次通訳者の長時間のリテンション能力を含むパフォーマンスを称賛する声と手話通訳者の熱意溢れるパフォーマンスを魅力的に感じたとするコメントが多くあった。第2部の映画上映に関しては、第1部の動画講演の内容を踏まえて、難民問題における通訳の役割が重要な存在であることや、「こちら側」の我々が理解できることについてなど、今まで知らなかった難民の問題について知ることができたという感想が多かった。

このように、本公開講座はコミュニティ通訳学コースの実習生や、在校生、そして一般参加者にとって、通訳についての理解を深めると同時に難民問題について考察するきっかけとなり、有意義であったと思われる。

反省点としては、質疑応答で多くの質問が寄せられたが、時間の制限がありすべての質問に答えられなかったこと、対面形式だけにとどまりハイブリッド形式では実現できず、参加者は愛知県近辺の人に限られたことなどが挙げられる。今後の課題としたい。



写真1 チラシ



写真2 コミュニティ通訳学コース関係者集合写真

#### 参考文献

- ベルジュロ伊藤宏美・鶴田知佳子・内藤稔(2009).『よくわかる逐次通訳』東京外国語大学出版会.
- Blommaert, J. (2001) Investigating narrative inequality: African asylum seekers' stories in Belgium. *Discourse & Society* 12(4), 413–449.
- Hale, S., Goodman-Delahunty, J., Martschuk, N., & Doherty, S. (2022). The effects of mode on interpreting performance in a simulated police interview. *Translation and interpreting Studies* 17(2), 264-286.
- Jacquemet, M. (2000) *Beyond the speech community*. Paper, 7th International Pragmatics Conference. Budapest, July 2000.
- Pöllabauer, S. (2023a) Research on interpreter-mediated asylum interviews. In Gavioli, L. & Wadensjö, C. (Eds.) *The Routledge handbook of public service interpreting*. London/New York: Routledge, 140–154.
- Pöllabauer, S. (2023b) Interpreting in an asylum context: Interpreter training as the

linchpin for improving procedural quality. In Ruiz R., L., Todorova, M. (Eds.) *Interpreter training in conflict and post-conflict scenarios*. London/New York: Routledge, 129–145.